

# 博物館ニュース

2004年第2号(4月13日)

## 《閃光》修復完了



## ● 《閃光》の修復が完了しました

4月9日、これまで修復に出されていた川崎繁夫作の《閃光》が無事に修復を終えて本館にやってきました。現在本館入口正面横に展示されています。材質は石膏を彩色したもので、大変ヴォリューム感の感じられる作品です。是非本館まで足をお運びください。（博物館は附属図書館三階にあります）

## ● 修復までの流れ

《閃光》は実は去年まではふすま同窓会館に置かれていました。同会館事務室に、作者不明のまま立っていたのですが、本館の学芸研究員である阿部成樹助教授（人文学部・西洋美術史）が平成十二年にふすま同窓会が発行した写真誌『ひかり北地に』に掲載されていた写真に目を留め調査を開始しました。その後、本館館長の元木幸一教授（人文学部・西洋美術史）、岡部信幸氏（山形美術館学芸課長）、加藤千明氏（山形美術館館長）による調査協力の結果、作品の正体が判明し、大正期に東京で活躍した彫刻家、川崎繁夫（1892～1924）の作品であることがわかりました。川崎繁夫は山形県寒河江市白岩出身の彫刻家で、1913年に「文展」に入選したのを皮切りに「文展」、「院展」で毎年のように作品を発表している若き天才彫刻家でありました。

この発見を期にふすま同窓会から《閃光》は2003年に山形大学に寄贈され、本館に収蔵されることになりました。発見時は足首、膝などが欠けていて、とても危険な状態であったため修復をすることになったのでした。本館では《閃光》展示のために免震台を準備し、修復完了を待ち望んでおりましたが、4月9日に《閃光》は作品本来の堂々とした姿を取り戻して本館へとやってきました。近々除幕式が開催される予定です。